



初日にもかかわらず2000人近いゴルフファンが来場、早朝から多くのギャラリーがスタンドを陣取り、往年のプロたちのショットに魅了した。

1991年、日本のバブル時代が終わろうとするこの年に、第一回目となる「日本シニアオープンゴルフ選手権」が鳩山カントリークラブ（埼玉）で開催された。ゴルフ景気に沸いた昭和ゴルフ史を築き上げた50歳以上のプロゴルファーたちが集結し、日本一のシニアゴルファーを決める大会だ。金井清一の3連覇からその歴史は始まった。その後も青木功の4連覇、さらにはグラハム・マーシユの2連覇。

なんと第九回までで3名の優勝者しか生まれていないのだ。その後も高橋勝成、中嶋常幸も連覇を成し遂げ、複数回優勝者を含めると、26回の歴史の中で優勝者の名前は、たったの13名。昭和のゴルフブームを生き抜いたアマチュアゴルファーたちにとっては「憧れ」の存在とも言える彼らの姿は「シニア」というカテゴリーに於いても圧倒的な強さを見せて、まさに「ヒーロー」なのだ。

そして27年目の今年、その舞台は福岡にやってきた。タニミス企画株式会社が経営するコースのひとつである「ザ・クラシックゴルフ倶楽部（キング・クイーンコース）」で開催されたのだ。50歳という年齢を境に、レギュラーツアーでも戦える選手たちが、シニアカテゴリーにデビューする。ルーキーイヤーであってもゴルフ歴は四半世紀を超える訳だから、すでに成熟した技術を持って

いる。さらに最少年齢のパワーという両面を持ち合わせた若手シニアたちが圧倒的有利と言えるだろう。前大会の覇者であるブラッド・マークセンはルーキーイヤーだった。ドライバー飛距離は300ヤードオーバー、シニア選手の中には230ヤードくらいのプロも少なくない。400ヤードホールならセカンドショットがフェアウェイウッドとサンドウェッジの差にもなる。



## 2017年度(第27回)日本シニアオープンゴルフ選手権競技

# 観戦レポート

写真提供：日本ゴルフ協会 文章：信藤民和

## 昨年覇者のP・マークセンが 圧巻のゴルフで沸かせた初日

300ヤードオーバーのビッグドライブ、ピンを刺す正確なショットそして、確実に入れるパッティング、全てがパーフェクトだった。

ザ・クラシックゴルフ倶楽部(福岡)、大会初日、いつも見慣れた景色が一変した。テレビカメラ、ギャラリースタンド、リーダーボード、ローピングテープ。そしてギャラリートachi、その視線の先には戦いに臨むそうそうたるシニアプロたちがいる。目に見える景色だけではない。ここ数ヶ月この日のために仕上げたコースは、明らかに普段とは違っていた。ラフの深さやグリーン hardness、それだけでコースは変貌する。熟練した技を持つ彼らでさえ、自然との闘いに翻弄され、スコアメイクに苦むことだろう。と、誰もが思ったに違いない。だが初日、まったくそのプレッシャーを感じさせないプレイヤーがいた。昨年覇者の「ブラダ・マークセン」だ。

13ホールを終えてノーボギーの5アンダーで、連覇を狙うマークセン。この日もっとも難しい14番ホール(クイーン5番)の第一打、5番ウッドでフェアウェイ右サイドをキープした。二打目はピン手前5メートルにオン、上りのフックラインを完璧に読んで、カップ真ん中から沈め、6アンダーにした。



大会初日、海老原清治が68で回り、エージシュートを達成した。「一緒に回った中嶋常幸の前で達成できたのは嬉しいよ(笑)」と語った。

地元宮若市からも多くのボランティアスタッフが大会運営をサポート。笑顔一杯でお手伝いするスタッフたちに選手も笑顔で接する。

初日から9バーディーの快進撃をみせるP・マークセン。ドライバー飛距離は群を抜いている。同組の川岸良兼、鈴木亨もプレーに圧倒。

## 特有の微妙なアンジュレーションも 強気のパッティングが冴えるマークセン どこまでスコアを伸ばすのか・・・

ンハイメートルに落ちて、バックスピ  
ンで5センチに。ゴルフはこんなに簡単  
なものなのか・・・と、その場にいたギャ  
ラリーは感じたに違いない。同組の川岸  
良兼、鈴木亨も感じたはずだ。3連続バー  
ディーで8アンダーとし、立ち止まること  
無く、尾崎を追い抜いた。

そして最終ホール18番(クイーン9番)  
もバーディーとして、ノーボギー9バーディー  
の圧巻ゴルフで初日を終えた。このまま  
マークセンが独走で行くのか・・・。

2位タイでホールアウトした尾崎直道  
は「バーディー・ノーボギー。久々の好ス  
コアに上機嫌。「コース状態がいいから、  
良いショット、良いパットさえすれば、  
バーディーが出やすい」と語った。上位に  
は前週、プレーオフでマークセンに競り  
勝ったキム・ジョンドクや2013年に  
全米シニアプロを制した井戸木鴻樹が追  
う展開となった。

大会2日目、気になる台風18号がいよ  
いよ近づいて来たのか、時折風が強く吹  
く一日となった。予選カットのこの日、  
選手たちは我慢の一日となった。その中  
でスコアを伸ばしたのは、またしてもマ  
ークセンだった。別次元のゴルフで、連日  
の「63」をマーク。  
マークセンが淡々とスコアを伸ばす傍

# マークセンが連日のノーボギー 9 バー ディで「18 アンダーパー」で独走態勢

1995年大会で青木功が記録した36ホールでの最少ストローク12アンダーパーを6打も更新。

どこまでスコアを伸ばすか、このまま優勝へ突き進むのか・・・

らで、虎視眈々とプレーする選手がいた。前日に続き、マークセンと回る鈴木だ。マークセンに負けじと前半だけで6バーディとして結局この日は、マークセンに及ばないが、7つスコアを伸ばした。昨日はマークセンから40ヤード差のドライバーショットを見せつけられ、自分のゴルフができなかったという鈴木、この日は自分ゴルフに徹した。

思い出せば、昨年の日本シニアオープン最終日、最終組で同じような展開だった。前半に4バーディの両者は一歩も引かない展開、後半にボギーを打った鈴木に対し、ノーボギーでホールアウトしたマークセンに軍配はあがった。

鈴木曰く「僕と回りやすいのかなあ、2日続けて、9アンダーでしょ。大人と子どもくらいの差に感じちゃいますね。練習不足です。差は大きいけど、明日も自分のゴルフをするだけです。」と語った。レギュラーツアーでの活躍を目標にする鈴木にとっては、今もなおレギュラーツアーで優勝できる同年代のマークセンは、ひとつの大きな目標に違いない。まだまだ練習不足ですと語る鈴木の口魂に感動した。

この日、同組だった川岸はふたりのバーディラッシュ(合計17個)に呆れた様子。朝2組目スタートにも関わらず、前の組を待つホールもあり、川岸の口から「前が遅いよー」

大会3日目、昨日に続き台風の影響で時折強い雨が降る中でのスタートとなった。最終組はマークセン、3日連続となる鈴木、そして尾崎となった。

逆転優勝に燃える尾崎だったが、昨日14番の第二打で悪化させた腰痛が再発し、無念の棄権となった。「がっかりだ。ショットした瞬間、動けなくなった。続けたかったが・・・と心の内を語った。

雨と寒さの影響からだろう、選手たちも縦距離が合わず、ショットする選手が多い。それを証明する数値が「平均ストローク」だ。15番ホール、18番ホールは、どちらも距離の長いホールで平均ストロークが落ちている。グリーンも少し重めで風も強い、明らかに昨日とは違う。この中で自分のゴルフに集中できた選手が上位に行けるのだろう。まさに「ムービングサタデー」と言えるだろう。

初日から快進撃のゴルフのマークセンが11番ホールで今大会初のボギー(47ホール目)を打った。アマチュアゴルファーには想像のつかない数字だ。その後、14番ホールでダブルボギーとしたが、15番ホールではピン横60センチからのバーディ、18番もバーディとし、この日2ストローク伸ばして20アンダーとした。ダブルボギー後のバーディは大きかった。彼の強さだろう。大きなミスはそのホールだけだった。

と声が出る。鈴木が「前は2時間ペースで回ってるよ」と川岸をなだめる。「あんなたちがバーディばかり取るからだだよ」と川岸。これには鈴木も帰す言葉ナシ。  
この日単独2位に躍り出たのは、腰痛を拘えながら戦う尾崎直道だった。14番ホールの第二打、右の深いラフからのショット後、さらにそれは悪化したようだ。腰をかばいながら歩く姿は痛々しい限りだ。このホールをダブルボギーとしたが、残り4ホールで3バーディ。フルショットが出来ないなか、見事なアイアンショットでバーディ奪取。マークセン同様、二桁アンダーとした。  
18バーディ(ノーボギー)のマークセンがこのまま誰も寄せ付けずに優勝するのか、3日連続同組となる鈴木が昨年の雪辱を果たすのか、腰痛という爆弾を抱えながらもトップに一番近い尾崎が逆転するのか、目の離せない3日目となりそうだ。そんななか台風は刻々と近づいていた。

「15 アンダーパーなら優勝できると思う」  
試合前日、マークセンは語ったが  
その目標を2日目でクリアした

身長は決して高くはないのだが、50歳を超えても300ヤードオーバーのドライバーショットを放つマークセン。



- ① AON時代を築き上げた中嶋常幸も今年で62歳。
- ② 4度のシニア賞金王という輝かしい成績を持つ室田淳。
- ③ 中央学院大学ゴルフ部で活躍する息子(貴之さん)との二人三脚でパッティング絶好調の鈴木亨。
- ④ スポンサー専用テラスギャラリ席。最終ホールセカンドショットの眺めは最高。
- ⑤ 今年8月に還暦を迎えたばかりの湯原信光。
- ⑥ 今年がルーキーイヤーとなる川岸良兼ももう50歳。
- ⑦ 68歳の海老原清治は大会初日にエージシュート達成。
- ⑧ マークセンを猛追する尾崎直道は、大会3日目に腰痛で無念の棄権となる。

初日、2日目の18アンダーが大きかった。決勝ラウンドはスコアは伸ばせなかったが、圧倒的な飛距離でプレーを楽に出来たことが勝利に繋がった。



- ①2、3日目に60台ゴルフで猛チャージを見せた鈴木亨。
- ②ギャラリーへファンサービスをするP・マークセン。
- ③前週、マークセンとのプレーオフを制したキム・ジョンドク。
- ④大会期間中に開催された「JGAジュニアゴルフレッスン会」に多くのジュニアゴルファーたちが参加。
- ⑤PGA会長となった倉本昌弘のスイングは、今もお美しい。
- ⑥最終日、68で2位タイに食い込んだ井戸木鴻樹。



台風で順延というアクシデントに見舞われながらも、コース管理スタッフ(左)と地元ボランティアのおかげで大会運営は成功した。優勝したマークセンを囲んで記念撮影。

## マークセンの勢いが止まった決勝ラウンド。鈴木、井戸木、加瀬、米山が追いかける。

優勝はもちろん、どこまでスコアを伸ばすのかに注目が集まったマークセンだったがスコアが伸びない。マークセンの連覇を阻止することはできるのか

そして迎えた日曜日、やはり自然の猛威には勝てなかった。台風通過に伴い順延となり、翌日(月曜日)に順延となった。

そして月曜日、前日までの荒天とは打って変わって、秋晴れの青空が広がった。最終組は昨年の日本シニアのリベンジを誓う鈴木、そして前週でマークセンとのプレーオフで勝利したキム・ジョンドクだ。

12番ホールでマークセンがスコアを落とし、鈴木、キムとの差は5打差に縮まった。13番ホールで、キムはピン手前2メートルにオン。このパットを決めればさらに縮まる。キムも気合いが入っていた。だが、そのパットはカップ手前で切れた。絶対入りたいパットだったはず、明らかに打ち切れていない。

その頃、前組でプレーする井戸木が15番でバーディとし、マークセンと4打差としていた。後続のマークセンも、15番で上りのラインをしっかりと決め、バーディを奪う。これで残り3ホールで、また5打差となった。

ワンオンを狙える16番ホールで、井戸木は2メートルのバーディチャンスにつけたが入らずパー。ワンオンの可能性があるこのホールを残すマークセンが俄然有利だ。マークセンは283ヤードを3番ウッドで放つ。キャリーでグリーンオン。ピン手前10メートルに乗り、難なくバーディとした。これで残り2ホールで6打差に広がり勝負あり。今振り

返ると、スタートホールでバーディ発進をした鈴木は、2番で3メートルのバーディトライを外して波に乗れなかった。12番でマークセンがOBを打った後、バーディを決めきれなかったキム、16番で2メートルのチャンスを物に出来なかった井戸木、マークセンに一番近い3人が、勝負どころでのパットが入らなかった。マークセンも8打の大量リードで最終日を迎えたことは過去にない。さらに最終日が月曜日となり、一度試合は終わった感覚もあったに違いない。マークセンの心を揺さぶれば、誰にも大逆転のチャンスは僅かだがあった。プレー後、鈴木は「終わって4打差は、やっぱり大きい。単なる4打差だけではないものを感じている。」と語った。2年連続で日本シニアオープン最終日を一緒に回って、敗れた鈴木だからこそ感じたことだろう。

マークセンは賞金王になって、来シーズンはアメリカのチャンピオンズツアーのQTに挑戦するそうだ。今後も新たにシニアデビューをする選手たちが増え続ける。試合数も増え続けている。これからのシニアツアーは本当に目が離せなくなるだろう。

大会開催に携わったボランティアスタッフを含め、関係者たちも、台風直撃というアクシデントを乗り越えての成功にはホッとしたことだろう。最後はマークセンを囲んでの記念撮影で全てが終わった。